

令和 7 年度

中学校 入学試験問題

適性検査 I



注 意

- 1 合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 2 問題は9ページまであります。
- 3 始めの合図があったら、解答用紙の決められた場所に、受験番号、氏名を記入してから始めなさい。
- 4 声を出して読んではいけません。
- 5 解答は解答用紙の決められた場所に、えんぴつではっきりと書き入れなさい。
- 6 試験時間は45分です。
- 7 時計以外の機能を備えた時計の使用は認めません。
- 8 試験中、体の具合や気分が悪くなったときは、静かに手をあげなさい。
- 9 終わりの合図があったら、すぐにえんぴつを置きなさい。

次の文章A・Bを読み、あとの問いに答えなさい。なお、※の付いている言葉には、本文のあとに〈注〉があります。

【文章A】

日本列島は、北半球の北緯35度付近に位置しています。東には地球でいちばん広い海である太平洋、西には日本海をはさんで、こ
れまた地球でいちばん大きな大陸であるユーラシア大陸が広がっています。この緯度と、大陸と海洋の境にあるという位置関係が、
日本列島の気候を左右しています。

日本列島が位置する北緯35度付近という場所は、北にある寒帯の気団と南の亜熱帯の気団との境界が、南下したり北上したりする
ところです。この気団の境界に沿って低気圧が西から東へ通過します。初夏にこの気団の境界が南から北へ移動するときには梅雨にな
ります。

太平洋の赤道を中心とした熱帯では、海流が東から西に流れます。そのため、太平洋の西部には温かい海水が集まるので、強い熱
帯低気圧(台風)が発生し、発達しながら北上してきます。このようにして日本列島は台風の襲来を、毎年頻繁に受けます。また、冬
に大陸から吹き出す北西季節風は、日本海の海水から多量の水分を取り込み、日本列島の日本海側に多量の降雪をもたらします。日
本は四季がはっきりした温和な気候に恵まれています。その反面、気候の影響も大きく受けているところでもあるのです。

一方、地球科学的な条件はどうなっているのでしょうか。地球の内部は、物質的な違いによって中心から核(内核、外核)、マントル、
地殻に分かれています。核は、鉄とニッケルを中心とした金属でできていて、内核は固体、外核は液体です。マントルと地殻は岩石か
らなる固体です。地球の表面をつくる地殻と、マントル最上部を含む、厚さ100kmほどの岩板をプレートとよびます。地球の表面
をおおうプレートは十数枚に分かれています。しかも、地球の表面をそれぞれの方向に動いています。

日本列島周辺には、アジア大陸をつくるユーラシアプレートと、北米大陸から伸びる北米プレート(オホーツクプレート)の二つの
陸のプレートと、太平洋の海底をつくる太平洋プレートと、フィリピン海の海底をつくるフィリピン海プレートの二つの海のプレ

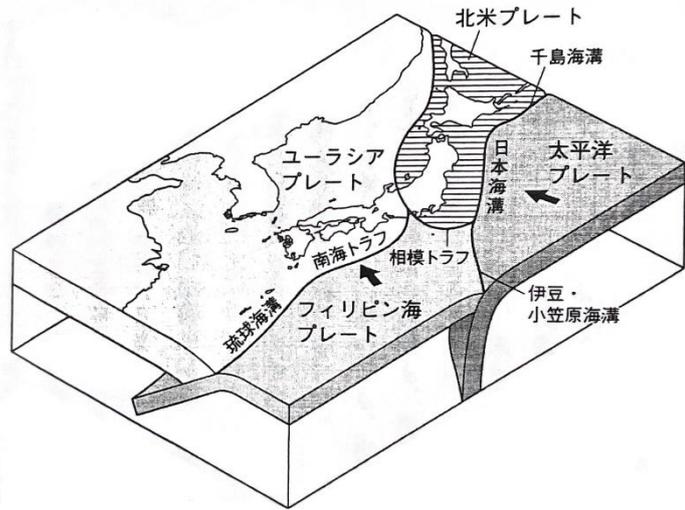


図1 日本列島周辺のプレート →は陸側のプレートに対する各プレートの動く向きを示す。

ト(海洋プレート)があります。日本列島は、陸と海の、合計四つのプレートが出会う場所と なっています。しかも、この四つのプレートは複雑な関係にあります。

細長い溝状の海底地形のうち、水深6000mを超えるものを海溝、超えないものをトラフと いいます。太平洋プレートは、日本海溝から北米プレートの下に、伊豆・小笠原海溝からフィリピン海プレートの下に沈み込んでいます(図1)。またフィリピン海プレートは、相模トラフから北米プレートの下に、南海トラフや琉球海溝からユーラシアプレートの下に沈み込んでいます。さらに、ユーラシアプレートの一部は、東北地方の日本海沿岸で北米プレートの下に沈み込んでいます。このプレートの沈み込みは、激しい地殻変動をおこし、高く連なる山脈と細長い弧状の日本列島をつくり出しました。さらに、沈み込んだ地下深くでは、火山のもととなるマグマをつくり出し、沈み込みによる圧力と歪みは地震をもたらしま す。日本列島のようなプレートの沈み込み帯は、地球上でも火山活動や地震活動が活発なところ となっているのです。

日本列島は周りを海に取り囲まれた島国です。その大部分は山間部で、国土の70%は山地です。狭い国土に山がそそり立ち、それを削って流れる大小の河川があります。残りの30%は、その河川が運び出した土砂によってできた平らな地形の台地や平野です。その平野部に、大都市が集中しています。この地形と人口集中が、自然災害をもたらす原因ともなっています。

日本には、災害対策基本法という法律があります。その法律では、「災害」を「暴風、豪雨、豪雪、洪水、高潮、地震、津波、噴火その他の異常な自然現象又は大規模な火事若しくは爆発その他その及ぼす被害の程度においてこれらに類する政令で定める原因により生ずる被害」と定義しています。さらに、「放射性物質の大量の放出、多数の者の遭難をとまなう船舶の沈没その他の大規模な事故」など、自然災害以外の原因による災害も定義しています。自然の営みによって人間に被害が生じたときに自然災害といいますが、被

害を受けなければ、災害とはいいません。最近では人間の営みのために、さらにその被害が大きくなることも増えてきています。①これは、とても深刻な問題です。

自然の営みは、地球が誕生して以来、人類が現れる以前から続いています。前にも述べたように、日本の狭い国土には、約1億3000万人の人が暮らしています。日本人だけでなく外国の方も生活をしてしています。とにかく、狭い中にたくさんの人が暮らしているのです。ですから、ひとたび自然が猛威を振るうと、たちまち災害がおこるのです。つまり、自然災害について考えるときには、人が暮らす場所が問題となるのです。

では、自然災害という視点から見たとき、私たちが暮らす日本はどのような場所でしょうか？

日本には火山がたくさんあります。火山の恵みである温泉や肥沃な土地を利用して、火山の周辺に人が暮らしています。しかし、ひとたび火山が噴火すれば、溶岩流や火山灰の降灰、火砕流、泥石流などによる被害がおきます。火山灰は、火山から遠い場所にも降ります。

また、日本は地震が多く発生します。その地震の揺れにより、山間部では、山の斜面の一部が、地下にできた「すべり面」を境にして移動する地すべりや、急斜面をなす山腹の岩石や表土が急激に崩れ落ちる山崩れがおきて、そこに暮らす人びとに被害を与えます。人口が多い平野部や低地では、液状化現象がおきることもあります。さらに、地震による津波が沿岸部に大きな被害を与えることは、東日本大震災でも記憶に新しいことです。

台風や集中豪雨による大雨は、河川の流量を増して、山間部の土石流や平野部の洪水を引きおこします。台風の際の高潮も、海岸部に大きな被害をもたらします。

つまり、日本ではどこにいても、自然災害を受ける可能性が高いということになります。そこで、昔の人は知恵を出しました。自然の猛威は昔から繰り返ってきているので、被害が出そうなどころには暮らさないようにする、また、被害をできるだけ少なくするような対策を講じるなどです。

明治以降の日本は、産業が発達し経済が発展してくると、人口が多くなり、暮らすことができ場所が少なくなってきました。そこで、技術開発を行い、地形を改変して人が暮らすことができる場所を広げてきました。現代では、農用地、工業用地、レジャー施設など大規模な開発や海岸部の埋め立て、資源やエネルギー確保に必要な、大規模なダム建設、道路拡張などを行ってきました。さらに、飛行機、新幹線や地下鉄、高速道路など交通機関も発達しました。

そのおかげで、日本人の生活が豊かになってきたのは確かです。しかし、大正から昭和初期にかけての物理学者である寺田寅彦は、「文明が進めば進むほど天然の暴威による被害がその激烈の度を増す」と、1934(昭和9)年に「天災と国防」という随筆に書いています。80年前に寺田が指摘していたことは、現在でもまったくそのとおりであることは、最近の自然災害の例を見ればわかります。

また、寺田は「氣象学的地球物理学的にもまた極めて特殊な環境の支配を受けているために、その結果として特殊な天変地異に絶えず脅かされなければならない運命の下に置かれていることを一日も忘れてはならないはずである」とも記しています。日本列島に暮らす以上、自然の現象がもたらす脅威のことを忘れてはいけません。

自然災害は、複数の自然現象によっておきるものもあります。たとえば地震で緩んでいた大地に大雨が降れば、山崩れや崖崩れをおこすことがあります。また逆に、大雨でたくさん水を含んでいる大地が、地震でゆるめられて山崩れや崖崩れをおこすことがあります。

1923(大正12)年関東大地震では、東京や横浜では、火災による被害が甚大でした。ちょうどお昼どきにおきた地震ということもありましたが、その日の氣象状況も火災の延焼を激しくしました。台風の影響で、風が強かったのです。そのため、大きな被害となっていました。自然災害は、③となることもあります。

(川手 新一・平田 大二『自然災害からいのちを守る科学』より)

〈注〉暴威…乱暴な勢い

激烈…勢いが激しいさま

甚大…程度が極めて大きいこと

【文章B】

20世紀までの建築の流れを一言でまとめれば、「大きなハコ」への流れということになると、僕は考えています。効率的に生活することのできる「ハコ」に人間を詰め込むことが、人間を幸せにすることだと信じ込み、その「ハコ」をどんどん大きくしていったのが、建築の歴史であり、人類の歴史であったのです。

そのプロセスには疫病も大きな影響を与えました。14世紀のヨーロッパを襲ったペストの流行は、狭くて不潔な中世の道、中世の街が原因のひとつであると考えられ、疫病への恐怖が、広い道と、大きな箱型建築を特徴とする、ルネサンス都市を生みました。

疫病や大きな災害などのカタストロフ(大変動)をきっかけにして、「大きなハコ」への流れは加速していきました。1755年にリスボンを襲った大地震、大津波は、3万人とも言われる死者を出し、リスボンの古い街は燃え尽きてしまいました。当時のリスボンに代表される、ゴチャゴチャとした街並みに代わる、新しい建築を求めるムーブメントが加速し、ヴィジオネール(夢想家)と呼ばれた一群の前衛的建築家が、純粋幾何学の支配する大きな箱型建築の絵を描き始めました。ヨーロッパの近代建築のきっかけは、リスボン地震にあったとも言われます。

レンガと木造の小さな建築群が、一気に焼失してしまった1871年のシカゴの大火も、アメリカ中を恐怖に陥れただけではなく、建築の歴史にも、大きな影響を与えました。コンクリートと鉄で、丈夫で強い建築を作ることが社会の目標とされ、アメリカの建築技術は一気にヨーロッパを逆転し、その後の20世紀の超高層建築へとつながるような、新しい大型建築の流れが生まれたわけです。

「大きなハコ」は安全のためだけに必要とされたわけではありません。「大きなハコ」に人間を詰め込むことで、効率を追究するというのが、産業革命以降の工業化社会の大原則でした。大工場ほど効率的でしたし、大オフィスほど効率的だというのは、工業化社会では真実でした。だから、中小の工場は消え、世界は大工場で埋め尽くされるようになり、世界の都市は超高層ビルの大オフィスで埋め尽くされていったのです。

しかし、「大きなハコ」は本当に人間を幸せにしたのでしょうか。そして、本当に効率的と言えるのでしょうか。そういう難問を僕ら全員ののどもとに突き付けたのが、新型コロナウイルスという疫病でした。「大きなハコ」に詰め込まれて働かされる人々は、非常に大きなストレスを抱えてかか生きていくことは、すでに知られていました。「大きなハコ」は空間的に人間を管理していただけではなく、朝9時からの8時間労働といった形で、時間的にも人間を管理していたのです。通勤や通学でも、人間は効率的輸送のために、狭い箱おに押し込まれていたので。

20世紀末からの社会のーT化によって、何が効率的かという基準も、すでに劇的に変わっていました。「大きなハコ」に詰め込まれなくても、十分に効率的に、そしてストレスの少ない状態で仕事ができる技術を、すでに人間は手に入れていたのです。「大きなハコ」はもはや少しも効率的ではなかったのです。

しかし、「大きなハコ」へと向かう慣性※力に流されるままに、人類は「大きなハコ」を作り続けて、都市はいよいよ高層化が進み、大都市への集中はますます進んでいたのです。

その人類の怠慢たいまんに対する警告が、コロナという疫病であったように、僕は感じています。未来の建築は、逆の方向に向かわなければなりません。「大きなハコ」へと向かう流れを反転させ、大都市へと集中する流れを反転させなければいけないのです。われわれは、そして君達たちは、ちょうど、そのような特別な時代、特別な折り返し地点に立っているのです。それは、建築を志す人間にとっては大きなチャンスだと僕は思います。

コロナを体験した後の建築の課題は、「大きなハコ」をどう解体するかです。「大きなハコ」は、コンクリート、鉄という固く、重い素材によって可能になりました。逆に、コロナの後には木、布、紙といったやわらかくて軽い自然素材によって、自然の中に溶け込んでいくような建築を作ることがテーマになります。人間を自然から遠ざけ、人間にストレスを与え続けていたコンクリート、鉄の建築から、自然と一体化するやわらかな建築へと向かわなければなりません。先述した「カサ・アンブレラ」※は、そんな時代の建築を探る試みだと言ってもいいでしょう。

コロナ以前の反自然の時代の建築は、プロの建設会社（ゼネコン）が頼みでした。プロが作ったものを、われわれは、高額で買わせるか、高額の家賃を払って使わせてもらうような選択しかありませんでした。しかし、「カサ・アンブレラ」は、自分達で組み立てられる建築です。民主的建築、草の根建築と言ってもいいでしょう。自分達の生活を、自分達でデザインし、そのための器を自分達で作ることができるのです。大都市に暮らしては、そんな自由はなかなか手にはいりません。ならば都市を出ていけばいいのです。今のIT技術を使えば、離れていても仕事ができるし、離れていても人とつながれます。どうしても、人と直接接触あいたくなかったならば、旅をして会いにいけばいいのです。

そういう新しい生活を可能にする家のためのひとつのアイデアが、「カサ・アンブレラ」です。それは大災害から逃れるための避難用住宅であると同時に、もっと大きな人類のニーズにつながった、もっと大きな歴史的な射程、使命を持つプロジェクトなのです。だから、設計料とか事務所の経営と関係なく、引き受けて全力で取り組もうとしたわけです。そして、その白い膜でできた空間は、とても開放的で、とても気持ちのよいものでした。

コロナの後を生きるみなさんは、もはや別の時代を生き始めています。従来の建築という枠組みを超えて、もっと自由に考えているのです。自由に考えなければいけないのです。

（隈研吾『建築家になりたい君へ』より）

〈注〉ペスト…ペスト菌による感染症

リスボン…ポルトガルの首都

ムーブメント…政治や経済における動向、活動

前衛的…時代に先駆けていること

純粋幾何学…直接的に図形の性質を研究する数学の一部門

シカゴ…アメリカの都市

慣性力…物体が現在の運動を維持し続けようとする性質によって生じる見かけの力

カサ・アンブレラ…カサを15個、ジッパーでつなぎあわせて作った家

草の根…一般的な民衆
射程…ここでは、ある理論などを適用できる範囲



カサ・アンブレラ
（ミラノ・トリエンナーレ、
イタリア、2008）

「問一」【文章A】の——線部①「これ」とはどのようなことですか。四十字以内で書きなさい。

「問二」【文章A】の——線部②「極めて特殊な環境」について、文子さんと杉男さんが話し合いました。 X Y に

あてはまるように【文章A】の言葉を使ってそれぞれ三十字程度で書きなさい。

文子さん…【文章A】から、日本列島は地理的に特殊な要素が重なり合っていることがわかったね。

杉男さん…たとえば最近では豪雨被害が多いよね。【文章A】によればその原因は、北緯35度付近の大陸と海洋の境にあるという環境が挙げられそうだ。

文子さん…日本列島は山を削るようにして大小の河川があるという環境も、土石流や洪水を生んで被害を大きくしているんだね。

杉男さん…シンガポールから来た友達に生まれて初めて地震を経験して、とてもおどろいていたんだ。日本では地震が頻繁に発生するよね。日本で地震が発生しやすいのはなぜだろう。

文子さん…それは日本列島が X Y 環境にあるからだと言えると思うわ。

杉男さん…地震が起こることによって Y X ので、さらに被害が拡大する可能性があるんだ。

「問三」【文章A】の③に当てはまる言葉として適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 危機管理

イ 人為災害じんい

ウ 危機一髪いっぱつ

エ 複合災害

「問四」【文章A】の二重傍線部「文明が進めば進むほど天然の暴威による被害がその激烈の度を増す」とありますが、現代の日本ではどのような被害が予測されますか。また、【文章B】の筆者は「カサ・アンブレラ」というアイデアを出していますが、被害を避けるために他にどのような提案が考えられますか。三百五十字以上四百字以内になるように書きなさい。

